

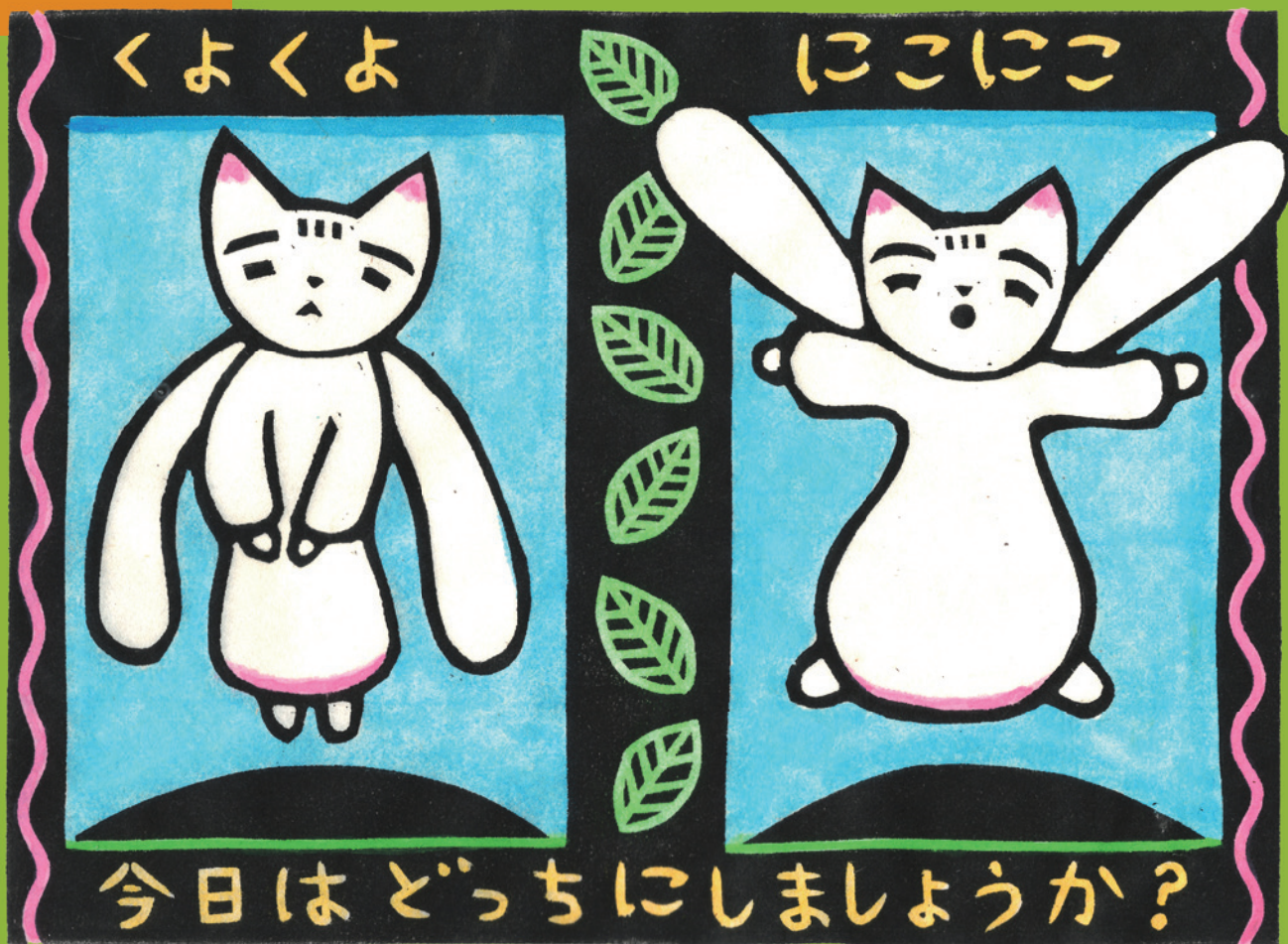


# ららばい、通信

2024年  
秋号

特集

タゴールの「日本への警告」に学ぶ



[ 目 次 ]

■ 唄のページ	…1	■ 女性村への挑戦 母性の時代	西館 好子 …14
■ 特集		■ 連載/日本子守唄紀行	
私達、日本人が、		「この子のかわいさ」	鵜野 祐介 …16
「今、考えなければならないこと」	影山 好一郎 …2	■ 連載	
■ 縁の不思議 偶然?	西館 好子 …6	立ち働く喜びこそ養生の粹	帯津 良一 …18
■ 連載/わらべうた 童謡 詞華抄8		■ 連載/直島便り	
桑原桑原 ここは桑原よも落ちじ	尾原 昭夫 …8	千客万来の南無庵	山根 光恵 …20
■ 連載/子ども虐待は、今		■ 活動報告	…21
反省	川崎 二三彦 …12	■ 寄付者名簿	

令和6年

ららばい通信 秋号を  
お手元にお届けさせていただきます。

焦げそうな夏の日々、暑いというより、熱いというほうが実感。熱中症への注意、不要な外出は控えるように、冷房も切らずに上手に使えと言われても無い家はどうするのだろうか。なにしろ命の危険を避ける、朝から熱き敵との戦いから始まる、まさに命がけの今夏だった。おまけに世界の地震の10分の1は日本という地震大国に、南海トラフの注意報までも発令された。まさに命がけの今夏だった。

温暖化の影響というけれど、さて、その根本的な対策などは打つ手も案もない。

立秋も暦の上だけ、残暑は名ばかり、台風シーズンの台風までもが異状をきたし、夏の終わりには二つの台風に見舞われた。当協会が計画していたイベント二つは中止せざるを得なかった。迷走台風10号に至っては、根負けしそうにこちらの神経の方が迷走してしまつた。何日も続いて突然の豪雨、雷に見舞われ、なかなか去つてはくれないイライラに疲れ果ててしまった。

かわいそうなのは子供たち。夏の思い出作りもままならない。外遊びも熱中症対策でおじゃん。冷房の部屋でスマホやゲームに打ち興ずるしか出来なかつたとなれば、こんなつまらない夏休みはない。

こんな亜熱帯のような夏がこれから来るとすれば、考えただけでもおぞましい。打つ手は、私たち一人一人の生活の見直しにかかっている。

日本子守唄協会 理事長 西館好子

シリーズ 誓女―祈り②

## あふれて

国見 修二（詩人）

〈想い〉あふれて立ち止まる  
〈想い〉こぼれて空を見上げる

視えない空だけど  
どっと風が吹いて

静寂もあり  
天に華咲くのかな

金木犀の香り

地藏様が背中を押してくれた



新潟県旧小国町二本柳小国和紙の町二本柳の路傍にお地藏様があつた。誓女は旅の途中ここで旅の無事を祈つた。

唄の  
ページ

# 秋の子守歌

## 「故郷の空」

スコットランド民謡  
作詞：大和田建樹

一、夕空晴れて あきかぜふき  
つきかげ落ちて 鈴虫なく  
おもえば遠し 故郷の空  
ああわが父母 いかにおわす

二、すみゆく水に 秋萩たれ  
玉なす露は すすきにみつ  
おもえば似たり 故郷の野辺  
ああわが兄弟 たれと遊ぶ

## 「庭の千草」

アイルランド民謡  
作詞：里見義

一、庭の千草も 虫の音も  
枯れて さびしく なりにけり  
ああ 白菊 ああ 白菊  
ひとりおくれて 咲きにけり

二、露にたわむや 菊の花  
霜におごるや 菊の花  
ああ あわれあわれ ああ  
人の操も かくてこそ

## 「秋の夜半」

作曲：C.M. von Weber  
作詞：佐々木信綱

一、秋の夜半の み空澄みて  
月のひかり 清く白く  
雁の群の 近く来るよ  
一つ二つ 五つ七つ

二、家をはなれ 国を出でて  
ひとり遠く 学ぶわが身  
親を思う 思いしげし  
雁の声に 月の影に

## 「久しき昔」

作曲：Thomas Haynes Bayly  
訳詞：近藤朔風

一、語れめでしまごころ 久しき昔  
歌えゆかし調べを 久し昔の  
なればかえる ああうれし 長き別れ  
めざる思い変わらざ 久しき今も

二、あいし小道 わすれじ 久し昔の  
永久のまこと 告げたる 久し昔の  
えみをたとう その類 語ることば うれしく

三、いよよ燃ゆる情や 久しき昔の  
語る面はゆかしや 久し昔の  
ながくなれと 別れて いよよ知りぬ まごころ  
ともに あらな樂しや 久し今も

## 「スコットランドの釣鐘草」

スコットランド民謡  
作詞：堀内敏三

一、こみどりの 森の下かけ  
ひやびやと 風がわたれば  
目をさまして 釣鐘草は  
風の歌に ひとりほほえむ

二、鳥も来ぬ 森の下かけ  
ひといろの 緑の中に  
白く光る 釣鐘草は  
さびしそらに ゆれてまどろむ

# 私達、日本人が、 「今、考えなければならぬこと」

## ―タゴールの「日本への警告」に学ぶ―

影山好一郎



影山好一郎 プロフィール  
防衛大学校本科(第9期)及び研究科(第8期  
電子計算講座)卒業。  
1971年海上自衛官として自衛艦あずま艦  
長付、海上幕僚監部防衛課にてP-3C導入担  
当、豪国統幕学校学生、第二航空群支援整備隊  
司令、防衛研究所戦史部主任研究官、防  
衛大学校教授・図書館長 帝京大学文  
学部史学科教授等を経て2012  
年退職。軍事史学会顧問。

「平和を求めるためには戦争の勉強をしなければならぬ」

「健康を求めるには、病気の勉強をしなければならぬ」

「機械の信頼性を確保するには、故障の勉強をしなければならぬ」

これらの逆説的な命題は、古今東西を問わず、平時戦時を問わず、人類が常に考え続けなければならぬことであり、世界の文化・文明進化の原点であろう。

戦後の日本は、軍部が主導した国家経営のミスリードのために、不幸な敗戦に直面し、驚くべき巨大な犠牲を払ったと言われている。

その結果の反動として、大多数の日本人は、戦争や軍隊という言葉自体に、激しい嫌悪感を抱き、耳をふさぎ、議論を避け、経済一辺倒の道をひた走るに至った。

その結果、日本は、歴史上稀有な経済大国となった。

しかし、その結果、国の安全確保に必要な不可欠な知見や健全な感性を失った。いわゆる軍事音痴で経済一辺倒の偏った国づくりが行われたのである。

昨今の多くの若者は、未だにその影響が拭い去れず、バブルがはじけたとはいえ、経済主体の浮かれた生活スタイルから抜け出せずにいる。歴史に対する無関心、日本文化の真価を見失い、大衆の芸も稚劣化の傾向を強め、人間的に知性の乏しい幼子の国になりつつあるのではないか。

歴史を緋(ひもと)けば、歴史は戦争の繰り返しであるといつて過言ではない。にもかかわらず、戦争や軍事に関することが、視野になく、平和は外交によって保たれているという、錯覚をもったままであるようである。いわば平和時にいて、乱を

忘れた「平和ボケ」である。

普段、聞きなれない、軍事とはいったいどのような解釈すればよいのだろうか。

如何なる家庭も、外出時や夜間は、必ず施錠するであろう。施錠は盗賊の侵入に対する抑止力になっており、万一侵入された場合は、家族は一致して何等かの抵抗策を講ずるのである。まず警察に通報する、と同時に、警察官の到着までの間、力ある父が抵抗・排除策を講ずるのである。施錠や力のある父の抵抗力が、国の防衛力であり、広い意味での軍事力なのである。

軍とは、国が養う国の戦闘集団であり、健全なる国の運営方針によって整備され、運用されなければならぬ。軍事力は本来無色透明であって、使い方に二通りある。一つは、「本土の防衛」である。これは、日本の領域に対する外敵の侵入(直接・間接)から自国を守る正当防衛(健全なる国

際貢献も含む)であり、受け身のスタンスである。もちろん、災害時の救助・救援の活動もこれに該当する。もう一つは、前者以外の目的をもった国策、因みに外国の市場や資源の掠奪、雪辱、見せしめ、国内の不満を外にそらす、あるいは独裁者が個人ないし国家の利益追求のため、等の、いわゆる道義にもとる不純な動機による「侵略」であり、能動的なスタンスである。

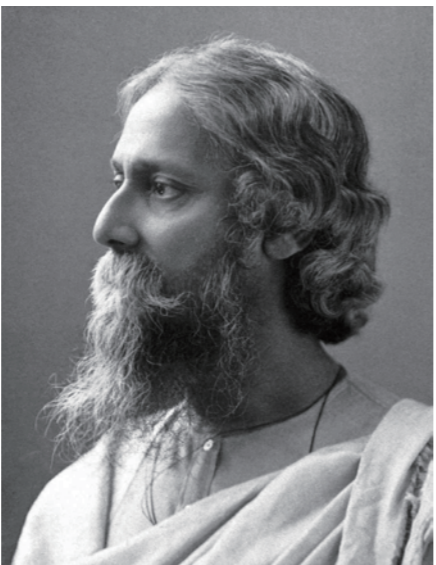
昨今の日本国内においては、このような軍事力に関する基礎的な知見が、必ずしも十分に教育されておらず、無知ゆえにこそ、あらゆる不安が大きくなっている。

昨今の、出口の見えない、ロシアのウクライナ侵攻、中国の南洋進出、イスラエル・ハマスとの報復の連鎖等、なぜ、一刻も早く、混沌と破壊を止め、回復ができないのか、また、今後、如何なる影響が日本に及ぶのであろうか。考えられることは、日本と北朝鮮、中国、ロシア(実効支配中の北方四島を含む)との距離は、同盟国である米国との距離よりもはるかに近く、外交等の失敗により、沢山のミサイルが飛んできて、都市や地域が無差別に爆撃の憂き目に会う可能性は皆無とは言えないのである。また、隣国に政変等が起り、膨大な避難民が日本に殺到してきた場合は、生活が守れるのであろうか。日本政府は、外交や軍事を如何に考え、どのように国民を守ろうとしているのか、国民として何をすべきか、殊に女性にとって、ミサイル破壊の恐怖から、家庭を守るのか、子供が徴兵令で犠牲になるのではないかなど、不安と恐怖が存在する現状にある。

このような現状の問題を解決する上で重要

なヒントが、戦前期に来日したインドの詩人・思想家・作曲家のラビンドラナート・タゴール(Rabindranath Tagore: 1861-1941)によってもたらされていたのである。

### 1 ラビンドラナート・タゴールの紹介



ラビンドラナート・タゴールは、激動期(19世紀以降)のインドに生きた思想家であり、国内外の苦闘の中で思想を形成していった。彼はベンガル州カルカッタの名門タゴール家に生まれ、厳格な家庭に育ち、熱心な読書家であった。1878年、17歳で英国ユニバーシティ・カレッジに留学し、西欧文化に直接触れたことで詩人として大きく成長したと言われている。1901年にシャンティニケタンに野外学校(現在のヴィシュバ・ブハーラティ国立大学)を設立した。1909年に詩集『ギータンジャリ(歌の捧げもの)』を刊行し、1913年にアジア人として初めてノーベル文学賞を受賞した。

第一次大戦中の1916(大正5)年に初めて来日し、日本文化を絶賛し、日本の国家主義を批判した。以後、1930(昭和5)年まで通算5回にわたって来日した。また、マハトマ・ガンジーらのインドの独立運動を支持し、ロマン・ロランやアインシュタインらの世界的知識人とも親交が深かった。日中戦争がはじまると、それまでの相見え論じ合った日本の英文詩人野口米次郎との仲は熾烈な論戦に変貌した。政府の主要人物は彼の思想を理解できなかった。彼は、第二次大戦に対する悲しみと、日本に対する憂慮を抱いたまま81歳で生涯を閉じた。

### 2 タゴールの日本文化に対する絶賛と日本の国家運営に対する警告

タゴールが初めて来日した当時の日本は、アジアに進出中の強国イギリス、フランスなどに侵略されないためには、「強い国にしなければ、生き残れない」と考えていた。

そのためには、日本自ら帝国主義化しなければならぬという認識に立って、脅威対象国ロシアを主に、日清・日露戦争を戦ったのである。戦勝後の国策として、戦場であった満州における日本の権益(ある国が他国内にもつ権利・利益をいい、土地・建物の借用、商工業、警察権などの獲得等)を維持拡大する方針を確立していた。しかしこの権益は、元々ロシアが当時の清国に対して、力によって得たものであり、それを日本が引き継いだため、最初から中国側の反発を買った可能性ももっていた。

さらにこの国策を擁護し、外国からの干渉を抑

止するため、日本は「帝国国防方針」を定め、軍事力を背景にして、中国に進出していったのである。タゴールは、日本人の美意識、克己(こつき)、自然との調和、自己犠牲等に感動し、それ故に、日本人が自らの価値を理解していないことを憂慮した。

日本人の自然観は、「人間と人間、人間と自然とは平等であり、愛によって結ばれるという関係」にあり、その愛ゆえに、生み出されるいかなる成果も、内部からほとぼしる深遠な美しさがある。そして、タゴールは、「日本人の間に溢れる美は、自然と人間への日本人の思いやりの結実である」とし、「その根源をなすものは、広く日常生活の身のこなしや心の中にある不可思議な忍耐であり、自己制御であり、心を集中しきって美的に仕事を行う心を確立させる禅定精神が働いているためである」と観察していた。自然も人間も、敬いによって繋がりが、その神髄にある「和の精神」が、日本文化の「生の哲学」であると捉えたのである。それは逆に、ヨーロッパにおける自然観は、「自然は征服と利用の対象に過ぎない」と彼の西洋に対する批判とは対極にあることが分かる。



要するに、日本文化が究極において、人や自然を敬い、傷つけず、ましてや他を侵略するなどという概念は微塵も存在しないものであるという点において、絶賛したのである。しかし、日本人自身が、その価値に自覚がなく、以下の三つの弱点を内蔵していると警告したのである。

一つ目は、日本が、西洋国家主義の欠陥を理解し得ないまま、その西洋に培われた高度な科学性と技術のみに強い関心を注ぎ、「盲従的従属の受容」をしていると批判したのである。日本が西洋化を急ぐあまり、相手を国に意思があることを忘れ、殊に中国の民族意識に無頓着であることを指摘したといえる。日本が西洋の科学技術や軍の積極的な使用法を無批判に受け入れて、最後通牒を以って対華21か条を要求したように、中国に強硬に進出していることに、タゴールは耐えられなかったのである。

二つ目は、日本人は逆に、その西洋文化の優秀性を理解していないのではないか、という憂慮である。タゴールは「総て人間性に顔を向けた際のヨーロッパは、比類なく立派である」といい、西洋文化は、歴史上、宗教戦争、植民地戦争、革命等に見られるように、長い権力闘争を経て、民衆の幸

福、社会の進歩のために、あらゆる犠牲と殉教を行い続けてきた成果なのである。西洋は人間の尊厳という高度な文化の伝達者でもあり、啓蒙者でもあるというプラス面に対する真剣な観察の見識が、日本にはないことを指摘したのである。最後の三つ目は、真の力は武器そのものにあるのではなく、その武器を用いる人間にある事を知るべきであるといい、国家経営の根本である国策の質とその擁護のための手段に位置づけられた軍との関係性を、的確に指摘したのである。良い国策は軍の良い働きを生み、侵略のような悪い国策は、軍を悪い働きに仕立てようとするのである。力の使い方は「自己保存の本能」、つまり真の「本土の防衛(正当防衛)」の枠を超えてはならないという、極めて常識的に、力や権力の行使には、道徳が不可欠であると指摘した。安易な武力発動の誘惑に打ち勝って、専守防衛に徹し得るだけの真の実力、忍耐、大所高所の見識並びに真の勇氣が不可欠なのである。

### 3 対日警告の歴史的意義(未来の遺産を問い直す)

① 先述のように、タゴールは、兵(軍)が悪いのではなく、それを操る人の心が問題であるといつた。そのためには、人は広く深く、豊かな教養が不可欠であるという。教養は国策に凝縮されるべきものであり、軍を正しく扱う基礎となるからである。そのあるべき教養の原点が日本文化の良さの中に、的確に宿っていると指摘し、日本の国家主義を警告したのである。タゴールは、日本文化が、「自己制御と和」、つまり「和の精神」を本命とし、軍力は国家主義のもとでの「侵略(国策擁

護)」に、断じて使うのではなく、「本土の防衛」に徹すべきことであると断じ、国家主義の方向転換を、心から強く示唆していたのである。

② タゴールは、日本文化の本質は、日本人は気付いていないが、「和を以って貴しとなす」という、世界平和の理念に合致しているとみていたといえるようである。

「和」自体が目的ではないが、お互いの利害の調整と、得られた結果が、「和」を確実に満たしていなければならぬという「生存の哲学」なのである。日本政府は、この日本文化の本質とその価値を、特に若い世代に対し、歴史を通じ、教育・徹底しなければならぬ。また歴史に照らし、世界情勢を的確に観察し、この哲学を実現可能な政策に具現化しなければならない。

③ 第二次世界大戦後の国際連合は、核保有の五大国(米・英・仏・露・中)によって戦争抑止のシステムが築かれたはずである。しかし昨今は、その責任を果たすどころか、自国あるいは自己の利益のために、自らが、独善的に軍事力を以って現状変革を試み、また他の関係国がそれを止められずにいるという情けない現状がある。叱責を恐れずに言えば、ロシアも、中国も、日本の満州事変と類似の論理に立っており、戦前期の日本がジレンマに陥っていたことと構造的に似ているのではないか? 今日の世界は、核が抑止力を失い、さらに、核ゆえにこそ、勝手放題に利益追求ができるという、いわば、世界は無法地帯と化しているのだから。つまり現在の世界は、戦前期と著しく似てい

るのである。これこそ、世界は、タゴールの警告の真意を十分に理解し、厳しく実践されるべきであるといえる。タゴールの警告である侵略的な武力行使の違法性を強く突き、戦争の停止と、国際連合の安全保障組織・機能の勇断ある変革が強く求められる。

④ 大多数の日本国民は政治に直接関わらないものの、老若男女にかかわらず、先ず、これまで述べてきた、タゴールの日本に対する絶賛と警告の意義、「自己制御と和」、「和の精神」を正しく理解することによって、冒頭に述べた不安や恐怖もなくなるであろう。戦争を憎むことは誰しも同じであるが、何時までも厭戦(戦争を嫌う)気分にとどまっているだけでは、戦争は抑止されない。冒頭に触れた「平和を求めるとは戦争の勉強をしなければならぬ」が意味する様に、個々人の立場において、戦争とは何か、戦争回避の方法や何をなすべきかを思索し、議論を深め、教養を高め続けなければならない。それによって、直接的・間接的に、地方や国の安全保障の民度が上がるのである。ひいては、国政を担う人々を動かす、健全なる安全保障が可能となるのであろう。これこそ、タゴールが戦前期に憂慮した日本が、今日及び将来に向け、世界の平和維持に主導的に貢献できる地位を得ることになるだろう。

(参考文献)『タゴール生誕百年記念論文集』、『人類の知的所産タゴール』、『逆説の軍隊』、『タゴール 東洋と西洋』、『大阪学院大学外国語論集 第47号』、他

## 「八月や六日九日十五日」

名句です。

八月六日は広島に原爆が落とされた日、八月九日は長崎に落とされ、とうとう八月十五日は敗戦。日本の夏に忘れてはならない歴史の名句です。

僧侶で長い付き合いの友人米野龍宗さんより私のところに手紙で送られてきました。最初は米野さんの自作かと思いました。

でも、そうではなく、この句をめぐっては俳句仲間の中で「自分の作品だ」と喧々諤々ともめている句でもあるようです。勝手に誰が言ったとしてもあながち間違っていないと思われるほど、実に作風も創意もない句です。盛夏の忘れてはいけない日本の重い八月の記憶につながります。米野さんはその事を亡くなった無着成恭さんにも話されたそうです。

「誰の句でもいい、この句を詠んで八月六日は何の日、八月九日は何の日、八月十五日は何だっけと分からないという日本人が増えたら、日本が減る時です。俺の句などと言わず、誰も口の端に上げればいい」と話されたということでした。

しかし、作者はおりました。俳句探偵と称して全国を捜し歩いた小林良作さんによれば大分県宇佐市にこの句碑があり、作者は広島県尾道市の医師諫見勝則(1992年)さんと突き止めました。長崎出身、広島で医師会長までしていた諫見さんは海軍兵学校最後の卒業生で原爆に遭遇したのは江田島でのことでした。まさに戦中真っ只中にいたのです。

平成26年に89歳で亡くなっています。米野氏とは同年くらいでしょうか、心底実感を口にしたこの句は作ろうとしてできた句ではないかもしれせん。

平和ボケと言われる今、広島長崎の悲劇を繰り返してはならない、真の平和を追求するのが戦争を知る者の責務、と米野さんも暑中見舞いにこの句を送ってくれたようです。

# 縁の不思議

# 偶然？

西館 好子

縁と言えば、血縁、地縁、仏縁。絆ほど強い結びつきではないが、かかわる偶然性に不思議なめぐりあわせを感じることは多い。  
縁もゆかりもない人と夫婦になり、というが、この偶然が必然となり後にアツと驚くことを生むのもまさに縁の不思議さだろうか。

かつて夫であった人が作家志望であったのも私の縁を思わぬ展開に持っていた要因の一つである。新婚時代から暮らしは読書と資料の読み調べが中心で、ほかはどうでもよかった。来る日も来る日も日課は図書館と古本屋通い、一日何冊読んだかの競争で明け暮れた。読書は習慣、何があっても本を読まないという日はなく、結局この習慣は習性となり、今でも私の「癖」となった。

分かなければとことんつきつめ探求し文章とする生業は作家になり、わずかのおこぼれ片鱗を頂いた私は、ほんの知識をもらうことで自己満足し、しかし、いつも本と一緒に、その習慣は離婚したあとも、私の一部となっている。  
子どもころあそんでいた町内の神社が実は子守唄が最初に採譜された神社であると知ったのは「日本子守唄協会」を設立した直後だった。

そうはいっても、女性の居場所づくりと調べてみたが、この計画はおいそれとうまくいくわけではない。フジコ・ヘミングさんという世界的なピアニストの「ピアノ」が廃校を利用した「ねぎぼうず館」にきたのは奇跡に近いことだった。  
「私が四歳から弾いていたピアノ、私より価値があるかも」とおっしゃって下さったピアノだ。なぜ見も知らない私に「ピアノを上げる」などいったのか、今もって謎なのだが、森の中で子供たちに弾きたいというフジコさんの願いも果たせなかった。  
フジコさんは92歳という高齢とはいえ、あつという間になくなってしまったのだ。  
階段から落ちた時点で再起は危ぶまれていたが、入院、療養中から誰からも誰にも情報は全くなかった。亡くなった後も、葬儀や偲ぶ会の予定もなさそうだった。

ある時、江戸川の大きな寺の大黒さんから、「好子さん、フジコさんあなたのお寺さんで眠っているみたい」という報告があった。  
江戸川区にある「安養寺」は父の実家の菩提寺で浄土宗、フジコさんの墓所などまだ誰も知らない。半信半疑で寺に電話をしてみた。  
「うちの本山の浄興寺にありますよ」といとも当たり前前に答えてくれて驚いた。

あくる日、さっそく両寺を訪ねることにした。まずは自分の先祖の墓に詣でフジコさんの墓所まで行ってみたい。  
安養寺と浄興寺は200メートルほど離れている。下町のごく普通の寺院だ。  
フジコさんのお墓は確かに「大月家」の墓としてあり、墓誌名も明記されていた。

実はそれも本からの知識で「ねんねんころりよおころりよ」の江戸時代の流行歌であった江戸発祥の子守唄の出どころはどこか、となった時、最初は深川佐賀町という資料が多かった。取材してもどうもピンとこない。つまり江戸のいたるところから自然発生的に流行していた唄なのだ。では誰がどう作り、どう伝えたのか、の大元はあるはずだ。

それがまさか子供のころに自分が遊んでいた神社のお坊さんが、この歌を採譜して残しておいてくれたから、後世にまで残ったと知った時は、地縁を感じた。

当時寛鏡院と呼ばれた京都醍醐寺の末寺が現在の浅草橋の「銀杏が岡八幡宮」、私の実家とは目と鼻の先、事務所も同じ町内だ。

ここにいた学僧「釈行智」が境内で採譜していたのだ。当時の江戸庶民たちが口の端に乗せた歌を採譜してくれていなければとくに子守唄やわらべ歌の伝承は途絶えていたに違いない。まさに、私にとっては故郷を残す唄そのものでもあった。  
子守唄を生涯のテーマにしようと決めたのは

ご住職の話では寺の縁が好きでよくきていたという。墓地を建てたご縁はフジコさんの弟のウルフさんがこのお寺さんの娘さんと結婚し、併設の幼稚園の運転手をしていたという。近所で「ウルちゃん」と親しまれていたそう。  
どうにも江戸川区とフジコさんのご縁は不思議な感じがするが、同じ地続きで私の先祖が眠っているというの、偶然にしてはデキすぎている。誰もが、まさか、という縁を持っているに違いないが、生きていて奇妙なつながりの縁はなんと不思議で面白いものだろうか。  
まだ面白いのはそれから一週間後、私と先夫との離婚のときにお世話になった弁護士さんが久しぶりに訪ねていらした。なんと生前のフジコさんの財団の最初の理事長が彼だったのだ。「まさかあ」とまたびつくり。何か分からない糸でもあるのだろうか。いずれにしても、しばらく行っていない本家の寺に詣でた縁ができた限り、フジコさんのお墓参りは私の行事の中に入ったことは間違いないさそう。早速お墓参りに行って来た。

間違いはなく、さっそく台東区にお願いし、子守唄の発祥の碑を建てていただいた。  
糸がほどこけるようにいろいろとわかることがあり、「子守唄」の脈は医者や学者、仏教や寺院、育児や教育にまで広がって今に至り、とうとう子守唄の「ねんねん」の語源が知りたくてインドに四回もいくこととなった。仏教を広めた聖徳太子は「寝入れ寝入れ、小法師」と子守歌を五人の乳母によって歌われていたという記載が伝記に残されている。

「寝入れ寝入れ」は「念々」となり、やがて「ねんねん」から今では「ネンネン」と書く字も違ってきている。仏教徒の縁は深いのだ。  
インドのネパール大学で書いて「サンスクリット語」だと分かった。

しかし、それに確証があるわけではない。わかったのは仏教とのかかわりと「やすらかにやすみなさい」という語源から、生の始まりと終わりに由来し、生死を日常としたものだと思測される。それを受けて赤子に母親が歌うということでは唄は生き延びた。

心穏やかに、慈愛をもって育てられなければならない命のカギは女性が握っている。

女性の特性や、心を養うことが子を育てて未来を創る。なれば、何より母親になる女たちの心の平安や癒しが大切に重要ではないだろうか。自然の中で時間を共有し、心を潤す、そんな居場所として群馬の森のある下仁田に女性村を設立した。「ねぎぼうず館」は、そんな女性たちの中から、何かを発信していく場所でありたいとオープンさせた。子守唄から発生した事業だ。



理事の剣持さんと墓参



三人だけの家族で人生の荒波をのりきった。その三人が眠る。安らかに。



墓所は江戸川区浄興寺

# 桑原桑原

ここは桑原よも落ちじ

わらべうた 童謡 詞華抄8

わらべうたの研究者 尾原 昭夫

風神雷神図 河鍋暁斎画  
日本の名画655



ここは桑原よも落ちじ

今、日本全国、連日の猛暑。さらに一時間に一〇〇ミリを越える猛烈なゲリラ豪雨と雷に悩まされている。あのものすごい稲妻と轟く音響には、子どもに限らず誰しも震えあがるのは今も昔も変わらない。「地震・雷・火事なんとやら」と昔から怖いものの代表とされる雷神は、八咫を取る▽鬼神として子どもたちには一段と恐れられる存在だ。

時には四〇度にも達する、まさに八地球沸騰▽といった言葉まで日常化するこの未曾有の酷暑と、次々に襲い来る豪雨、台風。人間のもたらした計り知れない大きな過ちに対する、それは八天の怒り▽八神の罰▽でなくて何であろうか。全人類が猛省し、直ちに行動に移らなければならない厳しい警告ではないか。

そもそもこのような伝承は、平安前期、右大臣菅原道真が、藤原時平の讒言によって大宰府に流され、その地に没したことに始まる。道真の死後、さまざまな災害が頻発、それを道真の怨霊のなす怪異と受けとめ、北野天満宮に霊を祀ることとなる。やがて全国に天神信仰が広まり、学問の神としても崇められるところとなって今日に至る。

一説に桑原は菅原家所領の地で、道真配流の後、度々落雷があったが、桑原には落ちなかったという言い伝えから、雷の鳴る時は「桑原桑原」と言って呪言としたと(夏山雑談)。

江戸後期、民俗学の先駆者である菅江真澄も、文化八年(一八一二)序「筆のまにく」に、「雷鳴の音すれば、尾張三河などにては桑原と唱へ、出羽陸奥のあたりには、男女桑の葉を髪にさしぬ。また桑の小枝を門々にさす処、また越後路にて雷動は、此処は桑原信濃へござれと唱ふ。」と記す。

古来わが国は養蚕を重んじ、宮中では御産の折り桑の弓に蓬の矢を用いる式があり、桑は悪魔を払うと信じられ、民間でも桑の木の箸を用いて病気を防ぐ習いもあったとされ、そうした基盤のうえに道真伝説が重なったものとも考えることができる。ちなみに川柳に次のようなほほえましい句がある。

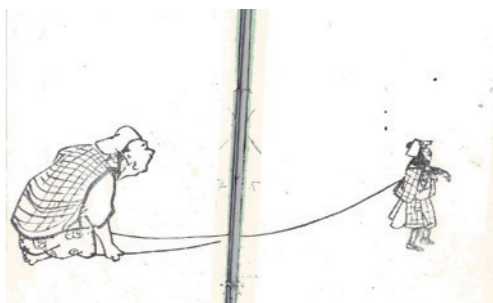
かみなりの鳴るときばかりさまをつけ  
かみなりをまねて腹かけやつとさせ



雷神 葛飾北斎画 北斎漫画  
日本の名画655

「うつぼざる」は終わりを次のようにめでたく結ぶ。

「かのまた獅子と申には、百済国にて普賢文殊のめされたる、猿と獅子とは御使者のもの。猶千秋や萬歳と、俵を重(ね)てめんく、く、く、楽しんで成るこそ目出たけれ。」



猿引き 山口素絢画  
倭人物画譜

前々回紹介した大蔵流狂言「うつぼざる」で、猿引きの猿が大名から命を助けてもらったお返しに演ずる、小歌舞の「淀の川瀬の水車」の先に、次のような雷除けのまじないの歌が出てくる。

とろろくと鳴神も、こは桑原  
よも落ちじ、く。

「うつぼざる」大蔵虎寛本『能狂言』寛政四年(一七九二)写

これと同じ句が『阿国歌舞伎草紙』にも見え、当時流行の歌舞伎踊りにも演じられていたことがわかる。さらに同じ大蔵流狂言の「かみなり」にも、おなじみの「桑原桑原」が出てくる。

光りくぐワラリく。ア、桑原くく。

「かみなり」大蔵虎寛本『能狂言』

## 雷除けのわらべうた

雷かみなり山行け おらあ桑の根っこだぞ

山梨県東八代郡豊富村。採録 山梨県立女子短大国文科

桑原くわばら お山へ行け

静岡県浜松市。採録 堀場宗泰

雷落ちい 桑の棒でたたくぞ

大阪府高槻市。採録 右田伊佐雄

どんどろろきが鳴ったぞ へそかくせ

兵庫県美方郡温泉町。採録 長谷坂栄治

桑木ぬ下てーびる(くり返し)

沖縄県那覇市。雷が鳴り始めると桑の木畑に逃げこみ

「桑の木の下にいるぞ」とうたう。採録 高江洲義寛

## 兎角子共達

兎角子共達ハ狂気ナガ能物、アイヤノボロく、  
肩二乗テ御所へ参ラウ、ネンネコくネンネコヤ、  
目ダニ覚バ、テウチくアワ、傾頭くシホ(塩)ノ目、  
ヨトルマヒノハリウリニカクレンボ、  
ハリ鞠蹴手鞠ツコ、正月ガラジャレバ 玉打ツ羽ツカウ、  
カルタ将棋双六、重カ半モ ヨイ物、弓矢フリツミ、  
五月ガオジャレハ竹馬ニ打ノツテ、印地シヨく、  
七月ガラジャレバキノ踊始メテ、  
フリヲヨウ踊ヨ、兎角踊ニヤガウカヌく。

『鶯流狂言伝書』享保九年(一七二四)以前、鶯伝右衛門保教写

乳飲み子の赤ちゃんからの幼い子ども遊びや子守唄に加え、成人近くの大きな子どもの中行事、さらには季節の集団踊りに至るまで、無心に遊ぶ子どもたちへの憧憬をこめた、長編狂言歌謡の秀



比比丘女 日吉利生記  
鎌倉時代 藤澤衛彦著 日本民俗学全集6

よく見よといふ義なり。ここを以て、僧都、地藏の悲願を感悦の余り、般若院の地藏の前に至り、この経を講ぜられて後、見ども童部を多く集めて、地藏と獄卒と取らん取られじとするところを、地藏法楽の為に、両方へ衆を分けて、学び踊り給ひけり。始めは、取りつく、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷といひけるを、よくも知らざる童部ども早くいはんとするほどに、「取てううひふくめ」といひけるなり。これ深き意ありて、薩樞の内証にかなふ故に、地藏の法楽にはこれを取らんとす。されば、吉野の天河の弁才天の御前にて、老耄白髪（まげ）の山臥（やまふし）まで、面々にひふくめをして法楽とす。これ本地蔵菩薩にて御座すなり。」

江戸時代には喜田川守貞の『守貞漫稿』に「子をとり子とり」について、江戸で「さあ取つてみ

心院の僧都よりは生まれりとなれば、いとくふるきこと也」(図参照)と見えるとおりに「子をとり子とり」を古くは「ひふくめ」と称した。

「恵心院の僧都」とは、平安中期天台宗の学僧、源信のこと。名利を嫌い恵心院に隠棲し、修行・勉学・著述に専念したため恵心僧都と呼ばれた。骨董集の記述は、室町前・中期の仏教説話集、玄棟著「三国伝記」にもとづく。少し長いが次に引用する。

「童部の戯に比比丘女といふことは、恵心僧都、閻羅天子故志王経を見て、その心を得て、始めさせ給ひけり。それ地藏菩薩は、中有迷津の方便、閻王庁庭の利益などこれあり。まず中有迷津の利益というは、獄卒罪人を引率してかへる時、戒問樹といふ木の木の本に、地藏菩薩罪人を乞ひ給ふ。(中略)獄卒力なくこれを与へ奉る。(中略)時に獄卒等、罪人を取り返さんといひ、取るべし取るべし、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷といふ。この時地藏菩薩いはく、上を見よ、頗梨鏡（はりのかがみ）、下を見よ、頗梨鏡といふ。意は、浄頗梨鏡に浮める罪業の衆生なりといへども、若しまた一善もやあらん、頗梨鏡の上をもよく

あんよ 西川祐信画  
絵本浅香山



この「あいや」は感動詞で、「上る」は次の「肩ニ乗テ御所へ参ラウ」につながるものと私は解釈していた。しかし池田廣司著『狂言歌謡研究集成』風間書房によって以前の解釈はとんだ誤りであったことが判明。次は同書の解説である。

「前田勇氏『上方語源辞典』に、あいや 足。アンヤ・アンヨ・ヨイヨイとも。小児語。〔語源〕近世前半期(明暦)寛



肩車  
小兒養玩気質



肩車  
鮮斎永濯画 吾妻余波

志田延義著『続日本歌謡圖史』至文堂 第三章 伝承童謡

まず冒頭の「アイヤノボロボロ」、この歌の意味がわかる人がどれほどいるだろうか。ここではカタカナ表記であるが、私が最初に見ていたのは次の表記であった。

アイヤノボロボロ

あいや上る上る

作である。まさにあの「遊びをせんとや生まれけむ 戯れせんとや生まれけん 遊ぶ子どもの声聞けば わが身さへこそ揺がるれ」とうたう『梁塵秘抄』の今様の心そのままに、子どもへのあふれる愛情をいっばいにこぼした歌である。「莊氣」は「幼氣」で、あどけなくかわいらしいさま、小さくていとおしいさま。

延)に「あいやのほろほろ」「あいやのほらほら」「あいやほらほら」「あいやぶらぶら」などの語あり、ぶらぶらと漫歩するさまにいい、幼児の手を引いて歩かせる時にいう。後世の「あんよは上手」というに当たる。「あいや」とは、歩くことの意なる「あゆみ・あゆみ」「あよび・あよみ」の下略「あゆ」または「あよ」の音訛したものか、歩くこと、転じて、「足」とある。」

そこで同じ著者による前田勇編『近世上方語源辞典』東京堂を見るに、次のように記されている。

「あいやのほろほろ」「あいや」は「あんよ」に同じく、足。歩行の幼児語。「ほろほろ」は、ぶらぶらと漫歩するさま。幼児の手を引いて歩かせる時にいう語。「あんよは上手」の類。明暦二年・夢見草 小春たつあいやのほろほろ時雨哉 信元(以下略)

△目から鱗が落ちる△とはこのこと、まさに広く学ぶことの大切さを痛感したのである。

ヨトルマヒノハリウリニカクレンボ

「ヨトルマヒノ」は鬼遊びでの鬼に呼びかける言葉、または鬼ごつこのことと解する。

「ハリウリ」は鶯流伝書の注記に「はりうりとはこまどりの事也」とあり、また『俚言集覧』に「こまどり」は「子とりく」の異名とあつて「子をとり子とり」をさす。

山東京伝の『骨董集』に「これ今あつまにて子をとり子とりといふわらは遊びの原なり。比丘比丘尼といふを音便にてひふくめといへり。恵



比比丘女図  
山東京伝著 骨董集

さいな」、京坂で「ちうりや取てくりや」とうたい遊んでいたことが記録されている。これら江戸・京坂での伝承例にも、どこか「三国伝記」の「取てううひふくめ」に通じるところがあるように思える。時代と地方によりこれほどさまさまな名称遍歴をもつ童戯もほかにないと思われ



駒鳥 石河豊雅画  
風流十二月 四月



こまどり  
都大路往還図 室町時代



子をとり子とり  
江戸遊戯画帖 横濱市歴史博物館蔵

子をとり子とりの伝承例

- 子をとり子とり どの子をとりか (東京)
- ちよつと見ちやあアとの子 さあとつちやみしやれ (東京)
- 子オとろ子とろ どの子を子とろ あの子を子とろ (関東地方)
- とるならとつてみる 子オとろ子とろ (関東地方)
- 子オとろ子とろ どの子がほしい (関東地方)
- これか これか これか それや (京都)

子ども虐待は、今

# 反省

子どもの虹情報研修センター

川崎 二三彦



### 凄惨な虐待死事件

「お父さんにぼう力を受けています」先生、どうにかできませんか」  
小学校のアンケートにこう書いて保護された女児が、父親の虐待によって死亡してから5年が過ぎた。当該の県や市の担当部署では、こうした事件を二度と起こしてはならないとの思いを込めて、女児の命日に黙祷などして冥福を祈ったという。

実は私は、再発防止のための検証に関わっていて、事件がなぜ起きてしまったのか、支援の課題は何だったのか等を把握するため、逮捕、起訴された父母の公判を傍聴した。さまざまな事実が明らかとなったが、まずは、虐待の凄惨な内容に心が凍った。

たとえば、父はトイレに行こうとする本児を押しとどめて浴室で大便をさせ、便を持たせた姿を写真に撮っていた。あるいは、食事も与えず

浴室で水に濡れた肌着だけの姿になると、「5秒以内に服を脱げ。5、4、3、2、1」などと命令し、本児が服を脱ぐと、寒い冬のさなか冷水シャワーを浴びせかけたという。本児が死亡したのは、この日の深夜だった。居室に戻っていた本児が寝室に行こうとすると、父は「寝るのはだめ」などと言って再び浴室に連れ込み、シャワーで顔面に冷水を浴びせ続けたのであった。死因は、こうした一連の行為による飢餓状態及び強度のストレスに起因するケトアシドーシス（急性代謝失調）、もしくは溺水とされた。

### 父の反省

このような父も、法廷では真摯な反省の態度を見せる。職員に連れられて出廷すると、裁判官席や傍聴席に対して毎回深く深くお辞儀をするのである。しかもその時間は尋常ならざる長さ。むろん退廷時も同様だ。過去、児童虐待にかかる公判を何度か傍聴した私も、これほど丁寧な人を見たことはなかった。また、初公判の冒頭では、「私の気持ちです」と述べて用意したメモを取り出し、読み上げた。

「私は事件発生直後から今日まで、娘にしてしまったことはしつけの範囲を超えたものであったと深く後悔をしてきました。未来の娘の姿を、私を含めてみんなで見るのが楽しみだったのに、私が自ら見られなくしてしまいました。娘には、深く謝ることしかできません。本当にごめんなさい。私がしてしまったことは決して許されるべきものではありません。（中略）両親、親族をはじめ、関係するすべての方々にか

ら申し訳なく思っております。私の気持ちは、永遠に変わることはありません。知りうる限りの事実を話したいと思います」

だが、公判が始まると、父は一転して、検察側が主張し、判決も認定した犯罪事実（虐待行為）をことごとく否認する。本児がアンケートに書いた暴行については、「していません」（本児が）うそを書いたと思う」「寝相が悪く、毛布をかけ直したのを勘違いしたのかも」などと話し、溺水死さえ疑われる冷水シャワーのことも、「暴れる本児を落ち着かせようとシャワーをかけたが2、3秒だった。鼻や口にはかけていません」と述べる。一体、先の反省の弁、反省を示す態度は何だったのかと思わざるを得ない証言であった。

### 上辺だけ

私が勤務する子どもの虹情報研修センターの研修で、最近ある講師が紹介した文献に『反省させると犯罪者になります』（新潮新書）があった。すでに10年以上前の出版だが版を重ねており、ネットで検索したら、キャッチコピーに「累犯者は八反省がうまい」と書いてある。

「なるほどー！」  
この父親を理解するにはもってこいの本だと考え、すぐに注文した。著者は重大な犯罪を犯した受刑者の更生支援に長年関わっており、その際、高2女子が書いたと想定した架空の反省文を用いるという。

「このたび私は、万引きという、大変恥ずかしいことをしてしまいました。（中略）私を大切に

育ててくれていた両親だけでなく、温かく見守ってくださっている先生方の信頼を大きく裏切ることになり、心から反省しています。今回、謹慎という処分を受けましたが、謹慎することによって自分のことを考える時間ができ、謹慎処分を受けたことを今は感謝しています。（以下略）」

この反省文について、一般の人の多くは「よく書いている。りっぱな反省文だ」との感想を抱き（著者も以前はそう思っていたとのこと）、一方で受刑者は、「早く謹慎を解いてもらうために書いたウソの文章。上辺だけだ」と考えるという。彼らは何度も反省させられ、そのうち「悪いことをしたら、とりあえず上辺だけ謝っておこう」とする態度が根付いているというのである。だったら、どんなに立派な反省文を書き、反省の態度を示しても更生にはつながらない。

### 加害者の視点

実は、少なくない受刑者が、反省の弁とは裏腹に被害者に対する不満を持っているという。そうした否定的感情を奥底に秘めた受刑者に対して、それを無視して反省だけを求めれば、不満は抑圧され、いずれはどこかで爆発する（再犯を繰り返す）。

そう考えると、この父も、母の実家がDVを嫌ったことで離婚を余儀なくされ、ようやく復縁したと思ったら、本児が父の暴力を開示して一時保護となった。逆恨みというほかならない。母の実家や本児に対する

怒りはくすぶり続けており、それが虐待の背景にあったことは想像に難くない。

### 児童虐待への対応

受刑者支援では、まずはこうした感情を吐露してもらい、そこから始めること。すると、それがきっかけとなって少しずつ幼少期を含む自身の不遇な人生を振り返ることとなり、心が整理されていくうち、素直な気持ちで被害者の立場、被害者の視点に気づいていくのだという。

とするなら、この父もこうした機会が得られることを望みたい…と書いてハッとさせられた。現在の虐待対応の多くは、まずは虐待行為を認めて真摯に反省するよう求めていると思われるからだ。私たちは、今一度、支援のあり方を見直すべきではないだろうか。





私の母は大正五年に生まれました。祖母は母を18才で出産しました。祖父は大正7年、軍艦河内の沈没事故で、徳山湾で亡くなってしまいました。若かった二人はまだ入籍しておらず、祖母は二歳の娘をかかえ未婚の母となりました。幸い祖父の実家が裕福な網元であったので、衣食住に困るということはありませんでした。ただ若い祖母がすぐ再婚し、母は父方の親戚をたらいまわしにされて育ちました。

生活には困らなくても、母には何処か、孤独の影がついていたように思います。よく言えば孤高ですが、ひねくれた物の見方や人あまり馴染めない性格は幼児期の体験から来たのだと推察されます。母親に捨てられたという怨念が尾を引いていたのでしょうか。

後に江戸の職人であった私の父と結婚し、とても大事にされているように見えました。「お前のお母さんは可愛そうな人だから」という父の口癖を私たち姉妹は子ども心に理解していました。父は磊落な人で嫌なことがあると、ひよいと家を出て、友達と会ったり、寄席や歌舞伎に心を遊ばせることが出来る人でした。そんな父に自分の愚痴や弱音をいう母でもなく、何処かで寂しい思いをしていたのかもしれない。母は身分も地位も学歴もありませんが、私たち娘三人にはどんなことも叶えてくれる「当たり前」の暮らしに役立つ知恵を持っていました。何一つ人に習ったことなどない母は料理、洋裁、編み物、黙ってなんでもこなしました。口には出さないまでも、私たちが子供への大きな愛情に裏づけされていたからと、今では痛いほどわかります。

この世に別れを告げる時間にも近づいている現在、女にとって何が大切を考えます。戦争をわずかに体験し、敗戦から、激動の時代を生きて、平和と安心の繁栄があるというのに、私には心の奥から敗北感がわいてきます。文明が発展し、ITは人間を超えるところまでできてしまいました。消滅しない民族にしていけるのでしょうか。温かな心に宿るすべての人間らしさを過去の遺産にしていけるのでしょうか。

教育の主体は父母にあり、責任の所在は心身を育てる家庭にあると思えば、女性たちがどれ程生活に対しての心を砕いてきたか、を過去から学ぶことはまだまだ沢山あります。生活は伝承の積み重ね、人が人に伝えられる唯一の宝なのです。女性に気づいてほしい。女性に自律した明日を持つてほしい。

振り返れば、戦後アメリカナイズされた人権、個人主義はあまりにも過去の日本の女性たちの欠点や欠陥をつくに終始した感があります。戦後には男女無差別、同権が叫ばれ、大いにそれを主張する論客も輩出されました。女性の個性や自覚ということすら嘲笑っていました。健康より美を優先する女性も多く、「消費者は神様です」という言葉に躍らされて中身を磨くことさえおざなりになっていたかもしれない。無理もありません。戦後は女性、お母さん、主婦などの言葉さえ、屈辱的で、因習的で古い日本というイメージが植えつけられ、女性の人間性は家庭と衝突するように、個人の利害優先の考えが横行している時代だったのです。高度成長期にはさらに追い打ちをかけるように住宅までが小単位の核家族になっていきました。知的であれ、本能に従うな、未来の女性は職業をもて、と若い日の私たちもそう教わりました。私も就職活動に血道を挙げていました。

しかし今私たちは、棚上げされた日本の良さ、未来のために継承する大切さを見直してもいい時期。その一人でありたいという重責を負った仕事を残してはいないのでしょうか。やはり、人は人間であるべきなのです。天と地、自然と共に、人と人との間に生きているから人間なのです。どんなに社会的に子供が育てられようと、母が持つ愛は永遠に保持されるという大きな本能をも見直していいのではないで



## 女性村への挑戦

日本子守唄協会 理事長



## 母性の時代

西館 好子

費と飽食は当たり前、飢える程の貧困はなくなりましたが、どれ程豊かになったとしても、その心は、悲しみや苦悩の共有、やさしさという人間の原点を劣化させ、不安が肥大化してきているのではないのでしょうか。私たちは何を生きがいとして、何を望んでいるのかも明瞭ではありません。二度と起こさないという戦争は世界のあちらこちらで勃発し、核の恐怖は消えません。地球は急激に資源の枯渇状態に近づき、食料もエネルギーも完全に不足する時代が目の前に来ています。すべてが無尽蔵であるはずがないと知っていても気づいたときはすでに遅いかもしれません。温暖化はやがて地球の破壊へ向かうでしょう。地球には回復能力があるとして、人間には破滅になるかもしれません。

今私たちに必要なことは考え方の転換、人間にしっかりと戻る、原点の立て直す以外にないと思います。心という作用を見定め、人として歩いてきた道を見つめ、愚行の先に本当に人間の叡智をもって浄化しなくてはならない時期が来ているはずですから。そして、それが出来る力を持っているのが「女性」だと思えます。今まで、日本の歴史を支えてきた女性たちの力を今こそ、発揮すべき時だと。男を支え、時代を支え、社会を支えてきた私たちは、その原点に今一度目を向け、次世代の子供たちの為に未来をつくる力を発揮すべきだと思います。社会的地位や特殊な能力や、男と肩を並べることだけではなく、生活を営むすべての現実立ち向かえる愛と忍耐は母以外になく、女性たちがその世紀を作る提起ができると思っています。生活への態度と責任は一生をもって次世代にうけつがれる「命の伝承」です。子供たちを機械漬けにして、刺激と暴力の日常にしているのでしょうか。情報に振り回され、人工的な食とスマホがなければ生きていけないという科学の奴隷にしているのでしょうか。親の心、おふくろの味、分け与えるやさしさ、本を読

でしょうか。子供たちに未来をあげたいという意味でも。なぜなら、母性愛は自分自身の延長線上にあるのですから。誰だって自分を愛さない人はいないでしょう。私の母も、どんなに苦勞しても生き抜いてこられたのは、自分への命の愛を子供に延長したのだと思えてきました。今、多くのお母さんは、子供の自由を勝手に踏みしり、社会制度の中にがんじがらめにし、子供の逃げ場をゲームや遊興に向かわせていないのでしょうか。

私の家に遊びに来る小学生の男の子は無限にゲームをやりたいといい、屋に家族のいない時間はベットポトルに放尿してまでもゲームを続けているそうです。啞然としますが、この中毒はこれから蔓延してくる予感がします。母と子が自然体であり続け、自然の教育こそ、母性のなせる愛の教育ということになるはずなのに親には見えていないのです。家庭に潤いと安らぎが失われていき、離婚大国はこの先も続くかもしれません。教育は日常の隅々から復権させなければなりません。それが生かされる社会こそが必要ということです。時間はすでに急を要しているのです。

思いあがるな日本、この時期こそ、女性たちが長い歴史の中で作り出してきた「当たり前」の日常「困ったときいつでも返れる家と故郷」。「生活表現」こそ母が持つ最大の力、未来への励ましになるはず。この国は太陽の国、女性が太陽になるとき、初めて自分の事として幸せを探ることが出来るのだと信じます。

私が目指す女性村は女性たちが自分のちからを信じて生きるという奇跡を大切にして、自分の生活を操縦してほしい、生活の中から何かを見つけてほしいという願いを込めて、過去の宝を忘れずに、改めて、小さな種を撒こうという人たちが創る場所です。心を創る自然の中で深呼吸してほしいのです。

## 第10回 「この子のかわいさ」

## (静岡県沼津市)

「子守唄サミット」という全国連絡会議があった。「子守唄の伝承地として全国子守唄協議会に加盟する市町村により、一九八七年第一回サミットが開催。二〇一五年の第二七回サミット(沼津市)参加自治体は、熊本県天草市、岡山県井原市、熊本県五木村、長崎県島原市、和歌山県岩出市、大分県佐伯市、静岡県沼津市。二〇一六年の第二八回サミット(天草市)を最後に終了した」(「市町村サミット」wikipedia 2024/08/28検索)。

本連載でも、第二回で岡山県井原市の「中国地方の子守唄」を、第三回で和歌山県岩出市の「根来の子守唄」を取り上げてきたが、今回は静岡県沼津市の「この子のかわいさ」を紹介してみたい。今年(二〇二四年)八月下旬、現地を訪れた。猛暑が続く毎日だったが、この日は前日の雨雲がまだ残っていて暑さも和らいでいた。但し、富士山にも分厚い雲が覆っており、沼津観光ポータルサイトのような「青空の下、白い富士を遥かに望む千本松原」にはお目にかかれなかった(ポータルサイトより転載<https://numazukanko.jp/spot/10056>)。

JR沼津駅から南へ約二五分歩いたところに千本松原の千本浜公園がある。その松林の一隅、若山牧水歌碑、明石海人歌碑、井上靖文学碑などの近くに「この子のかわいさ」の歌詞と楽譜を刻んだ石碑があった。二〇〇二年、沼津ロータリークラブ創立50周年を記念して建立されたという。各地の子守唄モニュメントが赤子を背負った母親や子守娘の銅像である中、斬新でスタイリッシュなオブジェとなっている。



坊やはよい子だ ねんねしな  
この子のかわいさ 限りなき  
天にのぼれば星の数  
七里ヶ浜では砂の数  
山では木の数 萱の数  
沼津へ下れば千本松  
千本松原小松原  
松葉の数より まだかわい  
ねんねころりよ おころりよ



「この子のかわいさ」の「限りなき」を、天の星の数よりも、七里ヶ浜(鎌倉)の砂の数よりも、山の木や萱の数よりも、そして千本松原の松葉の数よりも「まだかわい」と歌う。類似の表現は全国各地の子守唄に見られ、一九世紀前半成立の常陸国水戸地方の童謡集「弄鳩秘抄」(栗田惟良著)にも記されており、「このようなどうてい数えきれない、量的に無限の物を持ち出して、心情の深さを表現しようとする発想の型への注目、日本歌謡史の上でも重要である」(吾郷寅之進・真鍋昌弘『わらべうた』一九七六年、159頁)。

本連載第六回「江戸の子守唄」の冒頭部「ねんねおころりよ お

ころりよ/坊やはよい子だ ねんねしな」が登場し、メロディも類似しているが、そこでのAメロ(ファ・ファ・ファ・ミミ ファー・ラー・ファ・ミミ ド・ミミ・ラー・ファ・ミミ)と、Bメロ(低ラ・低ラ・低シ・低ラ 低シ・ド・ファ・ミミ 低ラ・低シ・ド・低ラ・低シ)がここでは逆になっていて、Bから始まり、A・B・A・Bと進んでBで締めくくる。また、四小節ごとの最後の音が「低シ↓ミ」「ミ↓ラ」と上行するのも特徴的である。

それではこの唄の歴史的背景には何があるのだろうか? 藤澤衛彦『日本伝承民俗童話全集 第二巻「中部篇」』(一九五三)に「八挺鐘の千本松原」と題する記述がある。

「むかし、東海道をゆききの人々がいちばんひきつけられた道中の見物は、富士山の変幻(うつりかわるけしき)と、八挺鐘とでした。八挺鐘は、富士山の景色のうつりかわりのように、東海道を、富士山のみえる往来に陣どって、少年は、腰につるした八挺の鉦を、歌ものがたりにあわして、てぎわよくたたき、つれの老僧は、たくみに太鼓を打って、調子をあわせます。『ひょうばん、ひょうばん』きょうも今日とて物語る八挺鐘は、ちようと、沼津の千本松原で開演です。(中略)

むかし藤原いま沼津 いまをはやりの子守唄

ぼうやはよい子じゃねんねしな

この子のかわいさかぎりない

天にたどえて星の数 お星の数よりまだかあい

地にたどえて小松原 千本松原小松原

松葉の数よりまだかあい

(187-189頁)

著者の藤澤衛彦は著名な児童文化史家だが、物語風に記述しており、一次資料としての実証性に乏しい。

光田憲雄『日本大道芸事典』(二〇二〇)によれば、「『八打鉦』は歌念仏の一種であり、昔は『念仏申し』といていた。初期には念仏踊りを一心不乱に踊っていたが、何時の間にか念仏を忘れ、遮二無二踊り(鉦を打つ技)を競うようになった。つまり『八打鉦』は、沢山(八)の鉦を指すと共に、沢山の鉦を敲きながら踊る行為(芸をする)ことでもあった」(387頁)とされる。



『人倫訓蒙図彙』「八丁鐘」

手掛かりを求めて沼津市歴史民俗資料館を訪ねてみた。この資料館は千本浜公園から約三キロ南東に位置する、緑豊かで潮風香る沼津御用邸記念公園内にあった。学芸員の鈴木裕篤さんが丁寧に対応下さり、『沼津市史 資料編 民俗』(二〇〇二)や『民謡緊急調査報告書 静岡県 民謡』(一九八六)をはじめ何冊も文献をご用意いただき、一緒に検索してみた。だが、これら現地の文献資料には「千本松原の八挺鐘」に関して、「と伝えられる」という以上の記述は見つからなかった。また、同資料館には八挺鐘という楽器(祭具)の所蔵もないとのこと。「もう少し調べてみて、新資料が見つかったら連絡します」とおっしゃってくださいだったので、今後の楽しみとしたい。

井原市や天草市のように、サミット終了後も独自に関連イベントを開いているところもあるが、沼津市では特に実施されていないという。子守唄というコンテンツだけでは、イベントの継続や発展も難しいのかもしれない。

本連載第七回「蓮如上人の子守唄(優女)」で紹介したように、(優女)は中世の大道芸・門付芸の一種、千秋万歳をルーツとする。一方、右田伊佐雄『子守と子守歌』(一九九一)によれば、近世の地方巡業の猿回し芸に「ねんね子守」という演目があり、その中に「ねんね子守はどこへゆく/海山越えて/山越えて/ぼんちゃん里にとつれてゆく/里のみやげに何もろた/デンデン太鼓に笙の笛」の一節がある(171頁)。将来、沼津市観光協会などが企画して、八挺鐘をはじめ千秋万歳や猿回し芸など子守唄に縁を持つ中世・近世以来の大衆芸能の数々を全国各地から招いて千本浜公園でリバイバル上演する。子守唄の枠を超えた芸能文化の祭典がこの地で実現したらどんなに愉快だろう。そう夢想している。

連載

帯津良一

# 立ち働く喜び こそ養生の粹



前回、酒は最強の養生法であると書かせていただきました。これには異論のある方もいらっしゃると思いますが、病院開設以来41年間にわたって休肝日無し、毎日飲みつづけているにもかかわらず、二日酔いはただの一度だけ、それも中国は内モンゴルの大草原で、親しい草原の友に挑まれてという特殊な事情を考えれば、むしろこれは例外です。つまり41年間飲みつづけているにもかかわらず身体の不調を来たして仕事に差し支えたことは一度も無いのですから我ながらよくやって来たと思います。

もともと患者さんの外来はすべて予約制ですから、いかなる理由があろうともこれをキャンセルするわけにはいきません。さらに土曜日と日曜日にもつばら講演ですが、これもキャンセルはできません。早い話が、風邪をひくわけにはいかないのです。

だから30年ほど前から

「あつーあぶない！風邪をひきそつだ」

と思ったら、当初は漢方薬の「葛根湯」のエキスを剤を直ぐ様、お湯に溶いて飲んだものです。

その後、日々の臨床にホメオパシーが登場するようになってからは、およそ2000年頃と思いますが、葛根湯に代わってアコナイト(Aconitum Napel)というレメディを用いるようになりました。

葛根湯もアコナイトも携帯には便利なのですが、葛根湯はお湯がないと服用できません。タクシーに乗っていて、あぶない！と思っても飲むことはできません。その点、アコナイトはピルです。ですからタクシーのなかでも口内に放り込むことはできます。ということですからアコナイト党になってしまったのです。

そして、効果ということになりますと、どちらも負けず劣らずです。じつによく効きます。ただし、何らかの風邪症状が出てしまってからでは効きません。勝負はあくまでもタイミングです。そのためには常に予感と直観を研ぎ澄ましていなければなりません。それにしても予感と直観が随所に顔を出す日常は、それは乙なものですよ。

おかげで、およそ30年間、風邪知らずです。仕

あたら、あれほどの才能が。と、いささか暗い気持ちになったものです。

そして、もう一つ、大好きな日本酒が飲めないというので、日本酒をシャーベットにまぜて舐めているというのです。これはショックでした。右半身麻痺と喋れないだけでも医者の仕事は無理だというのに、大好物の生ビールもシングルモルト・ウイスキーも呑めないとなると、早い話、生きていても仕方が無いということになります。

多田先生ほどの才能はなくとも、できれば脳梗塞を避けたいという気持ちになりました。まずは血液をさらさらにして梗塞を防ぐサプリメントを飲んでみようという気持ちになったものです。当時は業者さんが自社のサプリメントを持って訪ねて来て、一カ月分くらいのサンプルを置いていくのが習わしとなりましたので、自室のなかを探してみました。

やはりありました。D薬品の

「エヌケイシーピー」(精製ナットウ菌培養物含有食品)

です。ここにはナットウキナーゼなる血栓溶解酵素が含まれているのです。この服用を始めて、すでに20年を超えました。この間、脳梗塞の気配はまったくありません。もともと脳梗塞になんて、一瞬で起こるのでしょから、気配が無いからといって手放しで喜んでもいられません。

このサプリメントを初めて2〜3年した頃で

「帯津先生はなぜこんなに元気なのか」

という連載の冒頭で、私の全身の検査をしたこ

とがあります。その際、私の頭部のCTをチェックした脳外科の先生からの電話です。

「……先生くらいの年齢になると、ラクナ梗塞と呼ばれる小さな無症状性脳梗塞が二つや三つ見つかるものなのに、先生はまったく無いのです……何か予防法を講じていますか？」と。となるとサプリメントの効果と考えてもよいのではないのでしょうか。

次なるは下半身の衰えをできるだけ先延ばしにすることです。下半身の衰えも老化現象の一つですから、これを防ぎきることにはできません。しかし、いかなる仕事であっても仕事場の内外をこまめに動けなければ仕事になりません。だから死ぬその日まで、こまめに動く力を残しておきたいのです。

まずは筋肉の衰えを少しでも防ぐことです。そのためには良質の蛋白質を摂ることです。良質の蛋白質と言えば牛肉です。牛肉の蛋白質には9種類の必須アミノ酸が含まれていて、植物性蛋白質に比べてアミノ酸バランスがよく、体内への吸収されやすいのです。かつてアメリカ対がん協会が、がんの予防としていちばんに牛肉を摂らないようにすすめましたが、がんの予防をとるか健康長寿をとるかの問題であって、それは各人の死生観に従って選択すればよいでしょう。

もう一つは骨の脆弱化を防ぐことです。女性はホルモンの関係で脊椎の圧迫骨折に見舞われることが多々あります。これを防ぐには体内への吸収率のよいカルシウムを摂ることだと言われています。吸収率のよいものとなると、カルシ

事をキャンセルしたことはまったくありません。ありがたいこといつも感謝しています。もちろん仕事をキャンセルしないために日常気をつけていることとなると風邪ばかりではありません。ここで、その幾つかを挙げてみましょう。最初は脳梗塞です。こんなことがありました。いまでも敬愛して止まない大先輩の五木寛之さんと杯を酌み交わしているとき、五木さんが突然思い出したように

「あつーそつだ。多田富雄先生が脳梗塞で倒れたそつだ……」

と言います。免疫学の泰斗、多田富雄先生とはお会いしたことはありませんが、『免疫の意味論』(青土社)などの著作を通じて、いつも尊敬の念を抱いていました。

それから、少しずつ情報を集めてみますと、先生の場合は延髄球麻痺を伴っているために、右半身麻痺のほかに構音障害(喋れない)と嚥下障害(呑み込めない)を伴っているというのです。右手で字が書けない、喋ることもできないのですから、

ウムと燐との比率が2対1のもの。それは昆布であるといわれています。

昆布といわれて、はっと気がつきました。私の晩酌の友はお刺身と湯豆腐なのです。これは一年中なのです。夏でも冬でも湯豆腐なのです。その湯豆腐を支えているのが昆布の出し汁です。私は期せずして50年以上にわたって毎日、骨の脆弱化を防いでいたのです。

そういえば、私は腰痛というものを知りません。ホメオパシーの勉強のために度々訪れたスコットランドのグラスゴウで、あちらの女医さんから私の歩き方が好いとほめられたことがあります。すべて湯豆腐のおかげだったのです。うれしさのあまり、おつまみを用意してくれる女性にこのことを話しました。なんとその夜から昆布の出し汁がウイスキーのチェイサーとして登場するようになりました。これからは、また楽しみます。

## 帯津良一 プロフィール

1936年、埼玉県川越市に生まれる。東京大学医学部卒業、医学博士。東大医学部第三外科に入局し、その後都立駒込病院外科医長を経て1982年、川越市に帯津三敬病院を設立。2004年には、池袋に統合医学の拠点、帯津三敬塾クリニックを開設。日本ホリスティック医学協会名誉会長。著書に「代替療法はなぜ効くのか?」「健康問答」など。その数は100冊を超える。

## 千客万来の南無庵



南無庵 庵主 山根 光恵  
山口県長門市出身  
浄土真宗本願寺派 布教使

今年の夏は本当に暑い。各地で「突然の豪雨」とか「線状降水帯が発生」といった雨のニュースを聞いても、それって何のこと？と聞きたくなるくらい、この島には全く関係ない。ひたすらカンカン照りが続いた毎日だった。

そんな暑さゆえか、今年の夏の観光客は思ったより少ないようで、どうやら皆、もう少し涼しくなるのを待っているような気がする。

いつも「どうしてる？」と私の所へ顔をのぞかせてくれる友達もしばらくご無沙汰だ。皆、暑さに閉口して家から出ないのだろう。

そんな訳で私も、一日中引きこもってテレビで野球観戦。大谷翔平君の一人応援団として、誰にも遠慮なく拍手喝采で喜んでいる。

人間様の訪問は少ないけれど、近頃は動物の招かれざる客に困っている。なかでも一番の迷惑者は「猪」だ。

朝起きて一番に外を見ると、我が家の庭（…）と言いたい、手入れができずに草ぼうぼうの空地

のようなところが、あちこち掘り返されているのだ。「猪はミミズを食べる」と聞いていたけど、猪が食べるはずのない水仙まで、きれいに掘り返されて球根の上下が反対になっている。耕運機でも使ったのかと思うほど、見事に掘り返されている。

これらの水仙の咲くのは冬の寒い時期だ。ほかに咲く花が少ない時期なので、道行く人たちの目に留まるのか、「とてもきれいなね」と喜んでもらっている。ちなみに、水仙は球根が休眠期に入る7〜9月頃に植え替えをしておく、とても良い花が咲くらしい。しかし、自分で作業をするのは、年々年とともに膝の曲げ伸ばしが不自由になり、疲労も激しいから今は植え替えをしない。

さて話は戻って、被害状況を確認するため、夕方の少し涼しくなった頃、汗びっしょりになりながら土にまみれている球根を集めたら、かなりの量が掘り起こされていた。

しかも水仙だけではなく、庭のいたるところが掘り返されている。もはやお手上げと、役場に電話して何か良い方法はないか尋ねてみたところ、

畏をかけてみるようになった。畏をかけるとは、すなわち殺すことになるので、ちよっと嫌な気もするのだが…。

次のお客は、「ムカデ」である。

夏に一番来てほしくないお客だ。今年はおちこちの人から「ムカデに刺された」と聞いた。それだけ嫌だなど内心想っていたが、ある朝、目覚めて天井を見ると、集材材によくある木の節の模様…かと思いきや、それが動く。ひよっとして、とよく見れば、動いているのはムカデ。くねくねと体をひねりながらどこかに行こうとしている。落ちてきたら大変だと、寝起きの頭を一生懸命目覚めさせ、どうするのがいいか考えた。天井が高いので殺虫剤を撒いても届かない。箒も届かない。思案に暮れて、火ばさみと殺虫剤を両手に構え、落ちてきた瞬間、火ばさみで挟んで外に捨てることにした。ところが覚悟を決めて道具を探しているうちに、ムカデはどこかにいつてしまった。「まだ家のどこかいるのか？」と思うと怖くて怖くてしかたがなかったが、そこで、ふとプータンに行った時のことを思い出した。

プータンでは、輪廻転生という思想から、殺生を避ける傾向があるという。命のあるものは皆、身内にいた誰かの生まれ変わりかもしれないということだ。そのため、生きているものを極力殺さないようにするのだ。「そうだ、あのムカデは私の身の誰かの生まれ変わりだったのかもしれない。だとしたら、殺さないで済んで良かったじゃないか」と思うことにした…が、やはり数日は怖くて天井ばかり気にする日々が続いた。

するとある日、また新しいお客が訪れた。

## 活動報告

## ■スマセイキッズフォーラム in 高崎市（7月27日）

高崎出身の腹話術じゅじゅさんの登場で幕開け。松原健之さんのコーナーでは「たけし〜」コールが巻き起こりました。世界の音楽と歌の数々やオリンピック中で時を得た選曲をみんなで見ました。

## ■配食（毎月第二・第四曜日）

物価高騰、値上がりの夏は親にとって苦しいやりの季節です。新しい申し込みも多く、皆様離婚による経済負担に頭を悩ませています。個別に相談を受けながら、また、励ましたり、苦情や愚痴を聴いたりしながら配食しました。

今回はお米の支援がとても喜ばれました。シングルマザーの皆様の報告から

- 仕事と経済バランスの不安
- 離婚で夫婦間が解消され、父親として子供への無関心、援助の気持ちがないことへの怒り
- 行政、政府の援助の通達不徹底、利用できる人はいつばいもらえても、まじめに働いている人は損をするという感じがする。
- 精一杯ぎりぎり毎日暮らしているので自立などお呼びもつかない。

## ■ふれあいファミリーコンサート in 京都市（9月14日）

立秋を過ぎても猛暑の京都、親子ともに汗だくで来場され、ベビーカーが玄関に並びました。尼僧の高橋美清さんは命を陰に持った童謡唱歌を紹介し、歌いました。レインボーカルテットは、歌で子供たちを遊ばせ、大人たちの心にも響く曲の数々を披露してくれました。

## ■緑の森から衣食住を考えるフォーラム

台風接近、新幹線普通、飛行機欠航のため、このイベントは中止になりました。残念。また仕切り直します。

## ■ららばい合唱サークル 皆で楽しく歌いませんか

【日時】 2024年10月22日(火)

2024年11月26日(火)

2024年12月24日(火)

13:30〜15:30

【会場】 東京都台東区 入谷区民館4Fホール

【参加費】 1,000円

【問い合わせ先】

ららばい合唱サークル 会長 今井要一  
TEL 090-4072-3954

## INTRODUCTION

## 蘭日出夫短編小説集

## 「大人のためにメルヘン」

上毛新聞社

心温まる短編が五つ並んでいます。メルヘンとある通り、空想的な散文です。「ぬかみそと星娘」「マイクロマン」「哀しきAI」「頭文字爺」「母ふたり」いずれも現代の生活の中から大きく広が世界が広がっていきます。読んでいて気持ちが癒されています。一人も悪い人間が登場してきません。むしろ、悪の世界、悪行、悪人、は作品の裏に隠されているのに、それすらほんわか人間の哀しいおかしき所業に感じられてきます。

ふと、宮沢賢治の短編「猫の事務所」「よだかの星」などが頭をよぎりました。素晴らしい短編集、ぜひご購読ください。



亀の訪問

合掌

